◉書　評

# もっと冒険的に
## ——『ハンドブック 現代中国』を読む

愛知大学現代中国学部編／あるむ／2003年10月／280頁／1500円

阿部治平

私は事典類にはずいぶん世話になってきた。そのなかでとくに記憶に残っているのは『現代中国事典』（講談社教養文庫）である。いまから三〇年も前、文化大革命期後半に出版されたもので、中国文化大革命を礼賛する学者やジャーナリストが執筆した。項目によっては、毛沢東崇拝と現実に起った事件とのつじつま合わせに苦しみ、その結果生み出された奇想天外な主張を見出すことができる。六〇年代の半ばからこれら知識人が思考麻痺におちいった状況をよく反映している。この事典で今日まで生命を保っているのは、かろうじて実証的な記述だけである。

ここに検討する『ハンドブック 現代中国』は、中国初学者のガイドブックである。「はじめに」で意欲的に本書のねらいを示している。愛知大学現代中国学部に結集した当代一流の学者が執筆していて、執筆内容については執筆者個人が責任をもっている。一読してそれにふさわしい面白さがある。本書のおもな対象は愛知大学現代中国学部に進学した学生だろう

が、だれでも中国に関心をもつものが読んで役立つようにできている。

初学者のなかには、「三国志」や「水滸伝」の漫画やアニメを見て、これを中国学への入り口にしたものがかなりいるはずだ（本書がこの二冊を取りあげなかった理由はわからない）。こうした動機で中国に関心を持ったひとの中には、アヘン戦争や日清戦争・盧溝橋事件もろくに知らないものもいるだろう。かれらに学問への興味関心を起こさせるにはどうするか。この点で本書はさまざまな工夫をした。一つの項目を見開き二ページとし、「中国理解のキーワード」を設けて読みやすくするなど、じつに周到な気配りがある。また初学者向けとはいえ、事典ともなれば中国社会の各分野を一定の広さで網羅しなければならないが、本書は限られたページ数のなかでそれを十分に配慮した項目を立てている。

もちろん、こうした配慮につきまとう問題点もある。二ページではおさまりきらない内容をつめこんだ場合は（「民居」など）、著者の苦心のほどは読者にはとどきにくい。ゴチックの語彙部分で、説明抜きではわかりにくいものがある（予算外予算など）。オチがないように配慮したためとくに必要とは思われない内容（地勢など）もある。

さらに索引は事典類には必須だとおもうが、どうしてつけなかったのだろうか。できることなら表は見やすいグラフにしてほしかった。表紙見開きの地図二枚は、地域区分や交通状況などを示すことができるのにそれがなく、国境すらとおりいっぺんで、情報が少なすぎるうえ説明が不十分でもったいない。

さらに書いてほしかった内容をつけくわえる。

二一世紀なかばくらいまでに、中国とインドという最大の人口大国が先進国の仲間入りをすることは、もはや明らかだ。そのとき中国は先進的な社会主義国として存在するのか。このまま市場経済のコースをあゆみつづけて、高度に発達した資本主義国家になるのか。第三の道があるのか。

中国共産党はもともとプロレタリアートの前衛であるが、いま中共は社会のどの階層の利益を代表する政党なのか。江沢民が提起した「三つを代表する」は鄧小平時代の「四つの原則」とはどう関連するのか、「三つを代表する」は党に企業経営者を取り込むことを意味するが、そうなっても中共は労働者農民の党といえるのか。

全国人民代表大会の労働者農民の代表（とくに農民代表は数％）は、今日のように少数でもかれらの利益を国家予算などに反映できるのか。

日本では、首相が中韓両国が問題視する靖国神社を断固として参拝し、有力政治家が日中戦争は侵略ではないという主張をすることがある。さらにどんなに歴史的事実に反していようとも、過去を美化しようとする傾向に日本の若者は敏感に反応し共鳴する。なぜこうなるのか。

中国では、そのたび庶民の反日感情は強まり、指導者は歴史認識がもっとも重要だと日本の罪を問いつづける。そして、なにか日本人の非行に関連した事件があると——最近では日本軍遺留毒ガス問題、

珠海集団買春事件、西安わいせつ踊り（こうした事件は在日中国人の非行とおなじでこれからもつづくだろう）――中国ではただちに反日世論が沸騰する。このままで日中関係はよいのだろうか。

わたしの経験では、中国大衆の反日感情は時間とともに薄れるのではなく、逆である。それは日本側が戦争責任をあいまいにしているだけとはおもえない。江沢民政権時代、中国のテレビや新聞には反日抗日のドラマ・ドキュメントや記事は毎週のように登場していた。テレビの中では日本人のまねをするとき、「もしもし、はいはい、ばかやろー」というし、日本人について話すとき、たいていの庶民は「鬼子」とよんでいる。こうした現象はどの事典にも書かれない。きちんと報道されることもないし日本政府も不満を表明したこともないが、これを分析検討する必要があるのではないか。

さらに三兆円に上る対中ＯＤＡも中国では知る人は少ない。中国ではまったく報道されないからだ。たいていは「中国は日本による侵略のために人命と財産に甚大な損害をこうむったが、一銭の賠償金も取らなかった」という。わたしは青海省のいなかのバスの中で、漢人の青年からこれを三時間延々と説教されたことがある。この青年は、「こんな寛大な国家がどこにあるか、日本人は中国人に心から感謝すべきだ」といった。もちろん、かれは賠償に代わる多額のＯＤＡとか北京の環状道路が日本の援助で建設されたとかといった話は知らなかった。ＯＤＡは日本企業の中国進出には役立っているかもしれないが、友好関係の促進とは関係がない。本書に、戦後補償問題とともに対中ＯＤＡを検討する項目があってもよかったのではないか。

日本はアジア諸国と日中戦争と第二次大戦の講和条約を結んだものの、真の和解を実現したとは到底いえない。中韓両国国民は、依然として日本が戦争犯罪と植民地化を謝罪していないと感じている。中国に対しては日中平和条約と村山首相談話を基礎とするしかないが、関係は日日緊張している。

ものを知る中国人はたいてい日本の対米追従をあざわらう。だが、日本政府が日米同盟をことさらに強調しイラク派兵に拘泥する背景には、日本がアジア諸国を同盟者としていないことがある。アジアに友人がいない分だけ、わが日本はアメリカにすりよらざるをえない。ドイツが周辺国家と和解しヨーロッパの繁栄をＥＵというかたちにもっていった経過を考えれば、日本のこの五〇年とドイツとの違いは歴然としている。

本書でもいうとおり東部大都市の経済発展はすばらしいが、生まれた東西格差もまた大きい。中国先端産業・輸出産業は農村のすさまじいばかりの貧困によって支えられる構造である。この十年をとっても、「西北」は国内市場としてはさほど拡大したわけではなく、「民工」をはじめとする使いすての低賃金労働者と、石油天然ガスなどの資源を提供する植民地である。胡鞍鋼清華大学教授も短期間にこれほどの格差の開いた国はないといっている。おおまかに貧富の格差を示す二〇〇一年のジニ係数は〇・四九でいつ不満が爆発してもおかしくないレベルに達して

いる（『産経新聞』二〇〇二・九・二六参照）。「民工」が人間として存在できる労働条件を獲得し東西格差を埋める政策は中国にあるのだろうか。

このままでは「西北大開発」は西の資源を東に運ぶことを意味するだけになる心配がある。新疆から上海までの天然ガスパイプラインに並行する、長江の水を西北に運ぶ水パイプラインをどうして作らなかったのだろうか。

本書には歴史・経済・政治だけでなく生活・言語・芸術・衛生・教育についても行き届いた記述がある。登場したばかりの胡錦涛政権が前政権よりは庶民の生活に配慮する政策を展開していることについても、わずかだがきちんと記述されている。慧眼というべきである。さらにわたしにとって新しい知見もあった。これには感謝したい。

やむをえないかもしれないが、項目によっては類書とよく似た内容もある（料理・茶など）。また、記述内容が東部の発達した大都市に限られた項目があって、北京・天津と青海に暮らしたものとしては気になる。

たとえば雇用就職事情だが、西北の少数民族の大学高専卒業者の多くは、いま就職口がなく卒業即失業だ。西北では未就業者があふれているのに、当局は現地採用を優先せず、東部大都市では大学卒業者が西北に行って就職するよう奨励している。わたしにはまったく理解できない措置である。

本書もいうとおり、教育環境はかなり整えられてきたとはいえ、辺鄙な農牧村には義務制学校がないところもあるし、あっても遠すぎるかカネがかかりすぎて行けないものもいる。反乱鎮圧以来四〇年以上経っているのに、チベット自治区成年女性は八〇％をはるかに越える人が「文盲半文盲」状態におかれている。とうぜん（標高の高さも関連するが）チベット人乳幼児の死亡率はとくべつに高い。

いま民族自治地域でも役所の書類も請求領収書もみな漢語だから、漢語ができなかったらたいへん不便だ。遺憾なことに若者でも中学卒業者でないと漢語は不自由だ。それとは対照的に高等教育を受けた少数民族の中には漢文化に多かれ少なかれ同化し、またそうしなければ生きてゆけない状況がある。かれらにとって母語は一八歳までの言語でしかない。これからは、少数民族固有の文化を維持するのはじょじょにむずかしくなっていく。

大都市は職場によっては一定の医療補助があるのに、（中国は社会主義のはずだが）農牧村ではまったく医療保険制度がない。一人当たり年収は千元程度というのに、風邪で病院に行くと一回百元単位でカネがかかる。深刻なのは、医者も医薬品もない郷村がかなりあることだ。そこではひとびとは民間医療に頼らざるをえない。たのみの漢方医やチベット医やモンゴル医などは、内科はともかく虫垂炎の手術や単純骨折すら治療できない。SARSは幸か不幸か都市型災害だったが、農村ではSARS以前の問題が深刻だ。貧困と不衛生が肝炎と結核を生み、それが貧困を再生産している。

食品安全規制制度ができたのがついこの間のためか、中国にはゴミ食品があふ

れているし、もろに残留農薬のにおいのする野菜もある。「西北」で日常的に飲まれている「固形茶」の中には、得体の知れない木くずや衣料繊維が混じっていて、きわめて危険である。中国で食品工場の非衛生状態がしばしば報道されるようになったのは、胡錦涛政権になってからである。

西北では水不足は深刻で、チベット高原や黄土高原には乾燥化が進んで洗濯や体を洗うのにもことかき、飲み水すら乏しくなって、結局は移住せざるをえなくなった村もある。黄河源流の水も減り、星宿海の沼は干上がっている。ココノールはアラル海と似た運命をたどっていて、水位が毎年十数センチずつ低くなっている。

中央政府は環境保全を強調しているが、ところによっては、だれが見ても汚染源である公害企業が、なんの規制も受けることなく操業している。この企業が地方のおもな納税者である場合はとくにそうだ。

以上のような、今日的ではあるが基礎的な内容について、本格的に議論するには本書の容量は少ない。だが問題提起だけでもしてほしかった。そうでなければ、よく似た目的をもって数年前に出版された『中国百科』(大修館書店)をこえることはできない。本書は筆者が個別に責任をもつ原則で書いた事典だから、自説を主張できる。字数制限の許すかぎり反対意見も別立てにするか併記すれば、より現実味を帯び公平でもある。執筆者が自分の研究内容を紹介し自説を主張したとき、独断にすぎるといった批判を受けたり、項目によっては前後矛盾したりするかもしれない(本書にもソ連によるキューバへのミサイル持込みについてくい違いがあるが)。初学者だけでなく一般読者にとっても、中国政府の政策を紹介しているかのような無難でそつのない記述よりは、具体的論争的記述のほうが興味関心ははるかに高まるにきまっている。